同窓新報

題字・故 上野慧賢先生

駒大高校同窓会　会報

発行所
駒沢大学高等学校
同窓会
東京都世田谷区上用賀１丁目
〒158　TEL.3700-6131(代)
振替口座　東京 8-6188

40周年記念総会盛大に挙行

同窓会の発展を思う

副会長　大谷康憲

駒沢大学高等学校同窓会諸氏各位の皆様には、その後御健勝にて御活躍のことと衷心より敬意を表しますと共にご同慶に存じます。

さてわが駒沢大学高等学校同窓会創立四十周年記念総会が去る五月二十五日(土)午後四時より新宿ホテル、センチュリー・ハイアットに於いて開催されましたが、関係諸氏方の情熱と深い御理解、御支援に依り無事円成されましたことは誠に喜ばしいことでございます。

開会と同時に会場せましと大多数の先輩、後輩諸氏方が一堂に会し交流し、互いに手を差しのべては学友と共に、学生時代の苦楽を経験したことを思い出し、飲食することさえ忘れて、当時の語り合いの光景が至るところで見られ、様々なことが去来して参りました。

私はこのことに依って増々会員同志の意志の疎通を図り、肩の叩き合いによって、同窓会の充実発展があるものと確信すると同時に四十周年の歴史の歩みと共に記念すべき総会は有意義であったと思う次第でございます。

そして各方面で極めて多くの同窓会諸氏が活躍されて居られる様拝察しました。

私が同校に御世話になった昭和二十六、七年頃の社会はようやく戦後の荒廃から立ち直り、経済面でも文化の面でも今日の繁栄の胎動の始った時期でもあったのです。今日まで一万五千余名の会員をようする同窓会に発展し、既に四十年の歳月を経過してまいりました我同窓会にとって、その歴史的変遷のあとを顧みそのうえに今後のあり方にあらたな示唆を与へ、その発展に貢献することこそ同窓会一同の使命であろうと思います。今ここに同窓会が存在するこの事実を思うとき、自から諸先輩に対し敬意を表する次第でございます。おわりに関係各位の御尽力に感謝合掌し、更には会の発展を期待いたし諸先輩各位の益々のご健勝と御活躍を祈念申し上げます。

心のふるさと

名誉会長　羽住奎

昭和二六年、駒澤大学高等学校同窓会が結成され、爾来平成三年で満四〇周年を迎え、去る五月二五日新宿のホテルにて盛大に記念式典が挙行されました。詢にご同慶の極みであります。

ご参加くださった同窓の皆様とお会いし、それぞれ社会各職域で、学校で、お元気にご活躍されているご様子に、また年輪を刻まれたお顔に接し、心強く、教師であったことの喜びを噛みしめ、過ぎし日々の懐かしい多くの思い出が蘇がえり、胸にこみ上げてくるものがありました。皆様も同じ思いに駆られたことでありましょう。ともに学び語らい活動した友や恩師の消息等、当時をしのぶ話題は尽きせぬものがあったことでありましょう。各学校を卒業する毎に同窓会に入会しますが、やはり高校の同窓会が一番愛着を感ずるのではないでしょうか。時代背景や社会情勢がどのようにあったにせよ、青春の情熱情感の横溢した真っ只中を高校で過ごした者にとって、同窓生の集まりは独特の雰囲気があることは否定できません。

本校開校以来、振り返れば多くの事象がありました。中でも特に数度にわたる校舎の移転があげられます。大学構内、渋谷校舎、渋谷校舎と大学構内での分散授業、大学構内の高校校舎そして現在地の校舎、同窓生となられた当時の皆様には大変多くのご苦労とご協力をいただきましたが、この校舎移転が逆に本校にとって発展隆盛を招来したことにもなります。

しかしながら、既にご承知のとおり、現在生徒減少期に突入し、幼児教育機関、小学校、中学校、高校と順次その影響が現れ、中学校卒業者数の推計は、六三年度比で平成一一年には、四二％（六五、九〇〇名）減と予想されています。この減少は予想をはるかに越えています。特に私立高校は、その対応に苦慮しながらも、歴史と伝統と建学の精神を保持しつつ、安定した学校経営と更に飛躍発展のために、対策を樹立し将来の為に懸命な努力をしているのが現状です。本校としても質的向上を図りながら、施設や教育内容の更なる充実に努め、大学付属高校として確固たる基盤を再構築していかなければなりません。

全国の公立小中校の中には統廃合を余儀なくされた学校、所在地や校名、通学区域の変更等もあり、学校の消長も多様であります。

私事になりますが、かって静岡県で過ごした小学校から高校までの十二年間に、時々の教育制度改編により、校名が小学校三回、中学校二回、高校で二回も変わりました。県立中学校（旧制）・高校では六年間同一キャンパスで学びましたが、五年目（高校二年生）にして初めて下級生が入ってきました。卒業後四〇年の今日母校を訪問しても、校地こそほぼ同じものの、建物に当時の面影を残しているものは皆無であり、恩師は故人となられたり退職されており寂しさを覚えます。

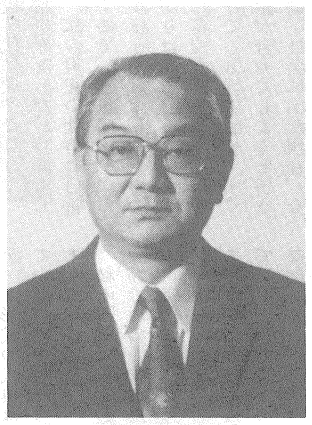
反面、母校が時代とともに変遷し発展している事実を目の当たりにし、感慨深いものがあります。同窓生にとって母校の消息は、ふだんあまり心に留めていないが、ふとした機会に友は、恩師は、校舎は、部活はと思い出すことが多いものであります。私自身母校同窓会関東支部の役員をしている関係で、母校との接触も多く、いろいろな情報や知識を得ることができ幸せであると同時に母校の発展を人一倍願っております。

生徒数減や教育制度が改定になっても、本校がますます興隆発展し、私学の雄として同窓の皆様の期待に添うべく決意を新たにし、学校経営に生徒指導に微力ながら万全を期して頑張っていく所存です。

同窓生の各位におかれましても今までにもまして、ご支援とご協力をお願いし、同窓会活動の充実と発展、併せて各位のご活躍とご多祥をご祈念申し上げ、ご挨拶といたします。

尽きぬ想い出に酔う

副会長　田上太秀



駒沢大学高等学校同窓会が発足してから四十周年が経ったことを知っての第一の感想は、よくこれまで続いたものだということである。

私が同窓会の役員になってからすでに二十数年になるが、その間に大きな催し物が二・三回あったくらいで、これといって注目され、目立つような大会はなにもなかった。しかし、そのような顕著な行事は数多くしなかったが、地道な活動を続けて来たことはたしかである。

毎年、幹事会・役員会を開き、年度計画を立て、実施し、成果を残して来た。この『同窓新報』を十五号も続けて来たことも大きな成果である。また母校の後輩たちの課外活動を活発にするために、クラブ助成に尽力して来た。母校の教育施設への援助もわずかながらも借しまなかった。

考えてみるに、『同窓新報』がこれまで同窓生諸兄姉に愛読され、同窓会活動にご理解いただいたことが、結果としてこのたびの四十周年記念大会の開催を実現に導いたものだと思う。

いくら記念大会を計画しても出席者がなくては成立しないわけで、それがこの四十周年記念大会は、大会運営委員会の予想を上回わる出席者数があり、盛会のうちに幕が降りたという事実は、やはり地道な同窓会活動が実ったものと考えるのは私だけであろうか。

記念大会は、盛会でした。ご参加下さった同窓生諸兄姉、来賓各位からも好評を得た。当日は暑い日でとくにクーラーを〝強〟にして会場を涼しくしてあったはずが、どういうわけか、会場の熱気が勝り、クーラーがまったく用をなさなくなってしまい、ホテル側の係員がお手上げの状態になった。

だんだん室内の温度は上がる一方なのに、参加者は、つもる想い出話しに暑さを忘れて酔いひたっていた。酒も食べ物も多分に用意してあったが、それもアッという間になくなった。しかし参加者はそれでも話に没頭していた。

予定の終了時刻になった。それでも立ち去りがたく、会場のあちこちにかたまって話し合うグループがあった。

もうすでに他界された先生もあり、ご存命であってもご高令のため、あるいは健康上の理由で欠席された先生もあり、会いたくても会えないさびしさが同窓生にはあった。

あの若かった先生がいまも若々しいお姿で出席された先生、反対に老け込まれた先生、また菩薩になった先生など、なつかしい先生に会えたことがどれほどうれしかったか。先生と一諸に写真におさまった同窓生たちが先生より老けて見えるのがまたおもしろかった。

「人生四十にして惑わず」と孔子が言ったが、同窓会も四十周年を境にして、これまでの地道な活動をまどわず続け、さらに発展させたいものである。継続は力なりというが続けることの大切さを四十周年記念大会を終えて痛感した。

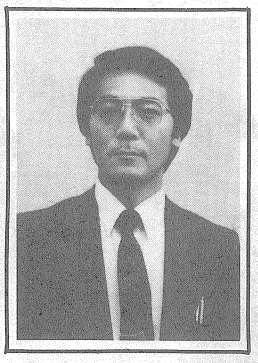
最後に同窓生諸兄姉のますますのご発展とご健康を祈念すると共に、同窓会活動に一層のご協力を賜りたく、念願申し上げる次第である。

◎入試日程

入学試験　2月18日
合格発表　2月19日
出願期日　1月末より

例年右記の通り行なわれます。本校を第一志望とするご子弟がおられましたら、同窓会事務局（浦）までご相談下さい。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



寺崎　隆教諭逝去

本校教諭寺崎隆氏は、昨年八月二十六日午後一〇時、永眠されました。享年四十二歳。

氏は、昭和四十七年三月駒沢大学文学部英米文学科卒業、同年九月より本校教諭（英語）として勤務（勤続十九年）されていました。

集い、語らう！

同窓会四十周年記念式典に出席して

教諭　伏谷義知

同窓会の四十周年記念式典が新宿のセンチュリー・ハイアットで盛大に催された。第一期生から若い卒業生にいたるまで、幅広い年齢層からなる同窓の集いであった。

そこでの雰囲気は実にさわやかで、懐旧の念ひとしおの感と思われる場面があちこちに見られた。まさにこれは味わった者でなければ分からないものである。

本校の建学の理念である「信誠敬愛」や「行学一如」をモットーとする校風は、社会のさまざまな分野の中で立派に生きているのだという誇らしさをしみじみと感じさせられた。

その喜びを感じるとともに、さらに決意を新たにして、校風を盛りあげ、社会で堅実に処し歩むことのできる人材を育てなければという気概がたしかな手ごたえとして湧いてきた。会もだんだん進行してゆくうちに、私は初めて担任をした卒業生と会うことができた。約三十年ぶりであった。もうすでに、それぞれの分野で立派に成長し涙がこみあげてくるぐらい嬉しく感じた。教師の喜びは、ここにあるのだということを今さらのように感じさせられた。話してゆくうちに三十年の歳月をあっという間に飛び越えて、昨日のことのように互いに話し始めた。

同窓会に出席した喜びは、この時間と空間を飛び越えた互いのきり離すことのできない絆とつい昨日のことのように想う互いの熱い心のかよいにあると思う。

これは、なにごとにも変えられない、そして体験しないでは分からない相互にほとばしる心の叫びなのである。その叫びは、同じ学舎の中から育まれた心のかよい、――教育の場から培われてきた者同志の逸することのできない姿なのであろう。

私は、この日のさまざまな華やかな中にも、互いの澄みきった、さわやかな一人一人のふれあいの中に、言い知れぬ同窓のありがたさと、ほのかな心のかよいを感ぜずにはいられなかった。そしてこうした会を礎にさらに、この同窓会がより発展することを切に念じてやまない次第である。

記念総会に出席して

一期生　鳩貝清太郎

高校に勤務していることもあって、勤務校の同窓会で挨拶をしたり、役員会に出席する機会が多くなっていたが、母校の同窓会には、偶然ながら、他の用事が重なって、出席の機会を失してしまっていた。今回、本当に久しぶりに、秋山会長をはじめ、一期生の面々と再会できたのを心から嬉しく思っている。

立錐の余地もない程の会場で、我ら一期生は十数名であったと思う。互いに名刺を交換し、名前を確認して、往事茫々。かすかな記憶のひもをたぐり寄せ、青春の日々に帰ったのである。かくしゃくとした白浜先生と再会できたのも、何にも増して心躍らせた。静かな語り口のなかに、青年教師の面影がふとよみ返り、私の意識は時空を越えて、駒沢の学舎に自由に遊んだのである。

人は年齢とともに、若き日の絆を思うものである。

人の世の荒波を越えて、立ち返るところは、帰するところ母校であり、母校をなかだちに、さまざまな思いを交歓させる場が同窓会である。

会のお開きの後、仲間内で、しばし感激の余韻を楽しんだ。また、いつの日か、再会を約したが、でき得れば、一期生の同期会を持ちたいと、誰言うとなく、口に出たのである。

五期生　小川　宏

一昔と言っても二十年位だがその頃には思いも及ばなかった四十周年同窓会を新宿で開催出来たという事は夢の様な気がする。が現に立派な会を開催出来たという事は現実なのだ。しかしこれ迄にする事は幾多の人の努力と綿密な打ち合せの賜物と感謝もし御礼を申し上げたい。私も馬齢を重ね会に出席しても今浦島の心境だがやはり諸先生並びに諸先輩に出会えば懐しさと親しみを感じやはり母校は我が故郷だと又心の支えだったんだとつくづく感じる今日この頃である。一時廃校の論も在った母校が今日雄々と在るのも苦しい時も母校の発展の為めに身を挺して存続を訴え今日の駒高を成らしめた諸先生諸先輩達の贈り物と思う。考えても見給え自らが卒業した母校が存続して居なかったら私共はどんな淋しい思いをしなければならないかを、願はくは母校の為めにも又諸兄の為めにも一人でも多くの参加を希望して止まない。一人一人の自らの参加するという意志が大きな輪になり駒高の発展と益々の盛況に寄与する事は明らかな事実だと思う。

私共一人では何もする事は出来ないが、一燈も点せば一隅を照らす事が出来るのではないだろうか。万燈となって母校を未来へと発展させようではないか。

合掌

十二期生　立野　政男

当日、中学の同級生で駒高でB組の黒沢君と一辺行って見ようかと言う軽い気持で出掛けて行きました。どんな昔の仲間と合えるか楽しみにしていると、会場で松井君に合い、しばらくして八木君に合い、小生が一番手にコンパニオン嬢とデュエットで唄い盛り上った処で昔を思い出し、応援歌を数人で指揮をとり楽しい内に終了、たまたま黒沢君の地域の野球仲間で、たしか四・五年後輩グループといきが合い、私の出している目黒のパブへ行くことに成り、大変盛り上り旧交温め、そうこうしている内に家が近くと言うことで再会したことのある上野先生並び白浜先生と諸先輩などおいでに成り、約二十名ぐらいの集りに成り、同じ釜のめしを食った仲間と一時我を忘れて楽しい一日でした。再会を約束して散会しました。これを機会にクラスの仲間と連絡できることを願い近い内に再会クラス会が出来ること楽しみにしてペンを置きます。

十七期生　深沢　秀一

同窓会四十周年記念総会に出席し、恩師の方々、先輩後輩諸氏と久々に語らい、高校時代に戻ったようで、非常に充実した数時間でした。私の現在の仕事は自営ですので、一日店内にいる事がほとんどで、横とのつながりは商店会くらいです。同じ高校を卒業したと言うだけで、気軽に話せ、すぐに話が合ってしまうと言うのは、社会に出た現在、なかなか出来ない事で、学生時代の仲間がこんなにも沢山いるのかと思うと、心強い気がしました。

次回も是非出席したいと、思っております。

十五期生　山田　晃照

同窓会四十周年記念式典に出席させて頂き、同窓会役員の方々に、深く感謝する次第です。

同式典に出席し、何人かの同期の方と会って、高校時代の思い出話をしたり、また、授業を担当していただいた先生方ともお会いすることが出来、意義ある時を持つことが出来ました。

私は、現在地元、金沢市で、専門紙を発行している者で代表取締役専務をしています。当社は、約八十人の会社で、内、駒大出身者も四人います。それぞれの担当で頑張っています。

同窓会に出席し、駒大高の若い頃の事が懐かしく思うこの頃です。

同窓会のますますの発展と、恩師、同窓の皆様方のご健勝を心から御祈り申し上げます。

二十四期生　野本　斉

先日のホテルセンチュリー・ハイアットで行こなわれた第四十回同窓会総会は、午後四時から始まりました。

私は、その同窓会総会が、午後四時半よりと勘違いしたので会場には、午後四時四十分ごろ到着したのでもう同窓会総会の立食パーティー形式の式典は進行していたので途中から参加しました。

私の同期に卒業して当日会場でお会いできた方は、雨宮幸仁君、浅井達君、大橋伸吉君、あと名前は忘れましたが、他に二人いたので私を入れて六名の方々が参加していました。

私は、二瓶要功先生と増田為三先生と、担任であった深谷　元先生とお会いし学生時代のことを話しました。

式典の中に同窓会一期の方々の音頭による校歌斉唱一期又は二期ごろ卒業された方の詩吟など楽しい一日を過ごすことができました。

私もカラオケが好きなので同窓会会場にて星ふる街角を歌ってしまいました。

皆さんまだ一高校生に戻られたみたいに楽しんでいたと思いました。

私の同期の参加が少なかったのですが、次回やっていただけるのなら、今回以上に参加者が多くなるように期待しています。同窓会事務局の方々頑張って下さい。

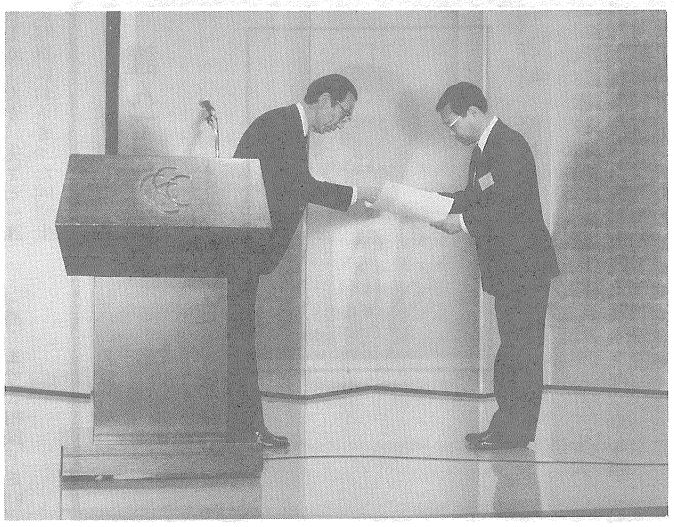
三十二期生　北村　信彦

時間の経過とは確実にあって周囲の風景や我々人間の気持ちを変えてしまうことがあるのだと思っていました。でもそんな事もないんだなあと深く感心させられる一日を過ごすことが出来ました。生意気盛りの高校時代のこと、学校でも担任の先生にも事あるごとに反発していた事を思い出して、御指導いただいた先生の前に立つと、背骨がピンとなる気がしました。また顔を見ただけでも昔のあだ名が浮かんで当時のままに呼べる友人との再会、卒業して十年が過ぎているのにいきなり時間が逆戻りしてしまうものです。

ひさしぶりの同期生との会話の中に活躍している様子を耳にし、また大先輩方の健康な姿を拝見し、今も変わらぬ先生方の熱い語り口が自然と自分の胸も熱くし、一服のカンフル剤、気持ちの良い風に吹かれた様に感じられました。今後は後に続く後輩達の活躍と母校の増々の発展を楽しみに次回四十一周年、そして五十周年へと盛り上げていきましょう。「駒沢大学高等学校、ファイト！　ソーレガンバローッ」。

『二十八年間』

教諭　浦　敏之



四十周年記念式典という晴がましい席上で、感謝状と記念品をいただくという栄誉を得たことに感謝します。本会のために功績のある諸先輩をさしおいてのことで、躊躇しましたが、秋山会長のお言葉に従い、ありがたくおうけしました。

昭和三十八年以来同窓会員として、お手伝いさせていただきましたが、これは自分のためであったような気がします。このことによって、多くの先輩や後輩と親しくさせていただいています。

四十二年からは母校奉職後は当然の責務として、本会運営に協力させていただき、今日に至っています。

私の仕事は組織の確立のために、縁の下の力もちになることと考え、規約の整備・名簿の発行・同窓新報の編集発刊を主軸としました。名簿は二十周年・三十周年記念時に発行しましたが、今回発刊できなく、残念でした。

住居を変更するたびに事務局に連絡してくれる人が増えて来たのをうれしく感じています。

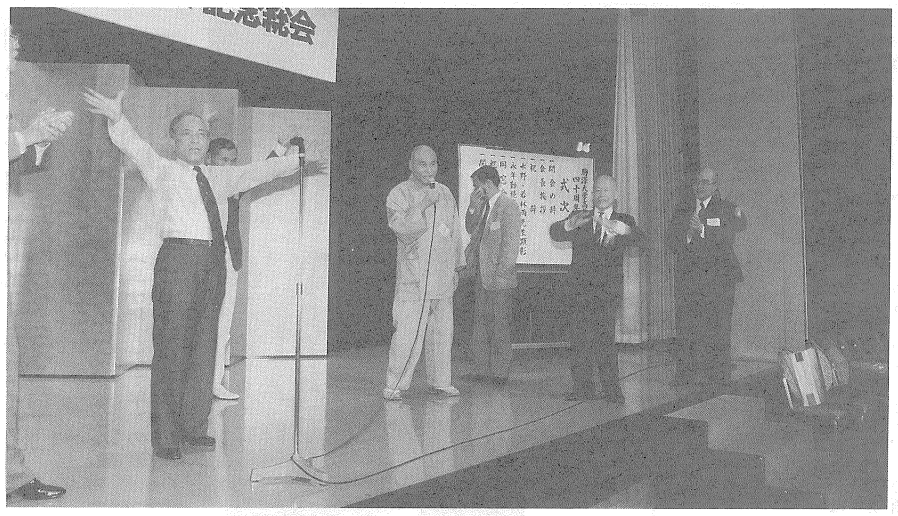
なお、名簿の管理はパソコンで行なっております。

氏名・住所のみは全会員分の入力が終了しましたが、他の項目については、現在入力中です。入力は有川友弘教諭の献身的な努力により終ったものです。同窓生ではありませんが、本会のために協力してくださっているのです。

新報の編集は日吉明広教諭にバトンタッチをし、より読みやすい紙面になってきたと思います。会員相互の連絡や、事務局・母校との橋渡し役となっています。

私の仕事は今後も変わることなく、続くことでしょうが、会員の皆様の協力なくしては、できませんので積極的に協力していただけることを期待しています。

なつかしい顔顔



第四期生　野村　安久

創立四十周年祝賀同窓会が開催されて、日常忘れていた学生時代の想い出がにわかに、懐かしく脳裏を駆け巡っている今日このごろです。

私は、戦後間もない昭和二十六年四月に入学、二十九年三月卒業の第四期生です。当時の校舎は大学敷地内にあった初期のもので、今にして思えば木造の粗末なものでしたが、まだ東京全体が復興しきってない時代でしたから、何の抵抗もなく、むしろ平和国家建設の掛け声に励まされ、希望に満ちた学生生活を送ったものでした。

卒業して既に三十七年有余、世の変遷は驚天動地の趣がありますが、卒業時四十四名の同期生も、当日出席わずかに四名という有為転変まっ只中の年代に差し掛かっているようです。

私は、母校とは目と鼻の先の地元に住み、私たちの時代からすれば御殿のような用賀校舎で、昭和五十八年度旃檀会（父兄会）会長の大任をおおせつかる光栄に浴し、学校との縁を深める幸運を得ましたので、格別の感慨を覚えます。

御来臨賜った先生方の御壮健が、何よりも心嬉しい同窓会でありました。

十五期生　小出登喜雄

振りかえれば早いもので昭和四十年に卒業してから二十六年の歳月が流れてしまった。初めての同窓会の出席でなつかしい恩師ならびに学友達に会えるという気持の動揺をかくしきれない反面、不安もあった。その不安というのは、恩師は元気で活躍しているだろうか、年をとって昔のイメージと変わったのではないだろうか、又学友も自分より貫録が出ただろうか、同じクラスメイトが一人もいなかったらどうしようか、等であった。しかし同じクラスメイトと待ち合わせる機会があり、まず安心した。

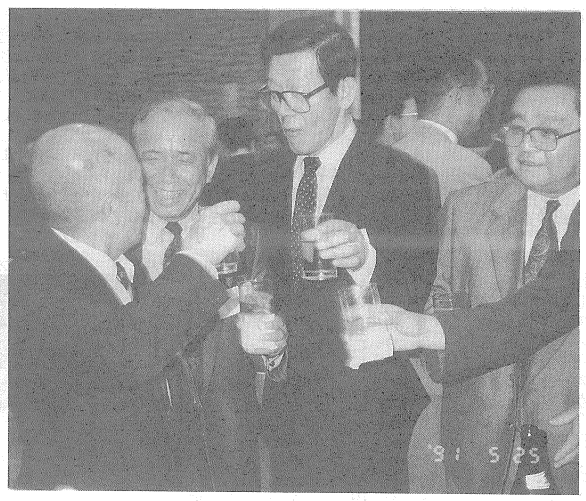
会場の新宿、ホテルセンチュリー・ハイアットにおいて、まず記念の式典が行われ、続いてレセプションに入った。その瞬間不安が一掃された。クラスメイトが五人、同期生が十人ほど、恩師の先生方もほとんどいらっしゃった。何といっても感激だったのは、学友達と自分は高校時代と何等変わってなく、恩師の先生方も昔のままで、お互い太ったか、しわが増えたか、毛が薄くなった位であった。昔は年の差を感じたが、今会ってみるといつでも同じ高校時代の気分なのであった。先生方ならびに学友達よ、いつまでもお元気で！

二十五期生　儀間　悟

今回初めて同窓会に出席し、とても楽しい時間を過させていただき有難うございました。思えば二十年以上も前毎日通った高校生活の中で、あの当時本当に個性有る先生方が多い学校だと思いました。そして移り変る年月の中で今も変ることのないなつかしい先生方と昔話に花が咲き私も知らず知らずのうちに高校時代の気持になります。また、今後の人生においてアドバイスもいただきあっという間に時間が過ぎてしまいました。それでも先生方はあれだけの生徒が入学卒業する中で当時あまり目立たなかった私の存在を覚えていてくだりとてもうれしく、またその御記憶には驚かされました。

今回残念ながら同じクラスの友達と会うことが出来ませんでしたが、とても充実した同窓会でした。

また是非出席させていただきたいと思います。では後れ馳せながら失礼いたします。



教諭　中村　強

ある学年の同窓会に招待されて参加することがたびたびある。確かな記憶ではないが、二十年ぐらい前に卒業させた生徒たちだと思う。

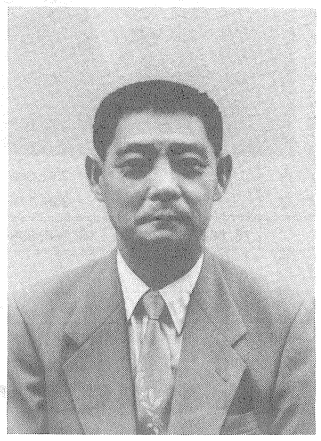
毎年、忘年会ということで開いている。わたしも三分の二ぐらいは顔を出しているので、常連は氏名も顔もよく覚えている。あるいは覚えているというより、おそらく会うようになってから新たに覚えたのかも知れない。いずれにしてもそれはいいのだが、十年後、あるいは十五年後になって、突然参加して来る卒業生が何人かいることがある。そういう時は顔を合わせて、何組の何々です、と名のられても、「ああそうか」とわかったふりをして返事はするものの、見知らぬおじさんでしかないことがある。そういう時は酒を飲み交わしながら高校時代の顔を思い出そうと一生懸命努力する。そしてようやく宴も終りに近付いたころになってふっと思い出した時は、ほっとすると同時に非常にうれしくなり、かろうじて面目が保てたような気になる。

これは自分も相当老化したものだと、教え子たちに悪いなあと、そういうことがあるたびに思い悩んでいたところ、五年ぐらい前に初めてその会に出て来た卒業生である「おじさん」がいた。そしていわく「おれ初めて出て来たよ。わかるだろ。わかるだろ。おれだよ、おれ。」と、自分の顔を指さしながら言った。そのとき、ほとんど同時に元同級生から返って来たことばは何と、「おれ！おれ！じゃわからないよ。ちゃんとクラス名と名前を言ってくれよ。」であった。当人はそこではじめて気がついたように、あるいはそんなことがあってよいものか、というような顔になって、元何組の、窓側から一列目の、前から何番目にいた何の某だよ、と必死になってわが身を説明したのである。冗談だろ、冗談だろ、と言いながら。わたしも最初はみんながからかっているのだとばかり思っていたが、冗談でもからかいでもなく、本当のことだということがすぐにわかった。

同窓生であろうと、長期間会わないでいるとわたしと似たようなものか、という思いであった。そういう意味でもこのたび、四十周年記念式典で多くの人が顔をそろえたことは、非常に有意義であった。

事務長就任ご挨拶

上田栢生



冬の厳しい時、同窓会諸氏の皆様は御健勝にて、御活躍のことと、心より敬意を表します。

さて、この度小生は小坂規矩雄事務長が平成三年三月を持ちまして、本学を一身上の都合により退職なされましたのにたいし、平成三年六月より母校駒沢大学高等学校事務長に就任いたしました。

思いかえせば、約三十数年前まだ、校舎が渋谷の東急本社前で大学第二部（夜間部）と共用で使用しておりました建物でしたし、我々新入生約一五〇名（三クラス）が入学し、授業を受けるのに教場が少なく、講堂で受け（三年生の時校舎の一部増設されました）たり体育の時間は、駒沢大学の隣りにあります都の空地（現駒沢オリンピック公園）で、その日の最終授業を受けた思いが今も頭の一部に思い浮びます。又大学野球部応援のため、都電（一両）を借り全校生が神宮球場まで行ったことが、昨日のように思いだされます。

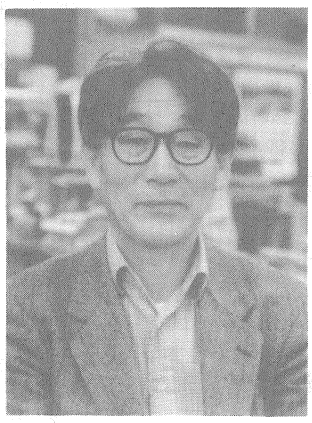
それは、おりしも、母校の同窓会創立四十周年を迎えた年にもあたるためかもしれません。この節目の年に対し、就任いたしました上には、教職員の先生方をはじめとして、同窓会員諸氏の力をお借りしまして、この重責に対し、一生懸命頑張りたいと思います。

この同窓新報が発行されますころは本校にとっても入学試験や卒業生を送る準備又進級される生徒達等のため、一年中で一番多忙の時期を迎えていると思います。

小生にとりましては毎日が新しい日ですので、教職員の先生方、同窓会諸氏の協力をえながら、新学年度を迎えたいと思います。

終わりに、教職員の先生方はじめ同窓会の諸先輩や関係各位の益々のご健勝、ご活躍を祈念申し上げましてご挨拶といたします。

市川仏乗先生ご退職



市川仏乗先生は、昭和三五年、本校に倫理社会・政治経済担当教諭として奉職、以来三一年間の長きに渡って、本校の教育に尽力されてこられました。

先生の奉職時は、生徒激増期で、校舎も渋谷から駒沢大学内の校舎に移転、生徒数も二千人を越えるほどの成長期でした。こうした活気に満ちた成長期の学校の中で、若い市川先生は鍛えられたのでしょう。

私が知っている昭和四十年代の後半から五十年代の市川先生は、最も教育研究活動の充実していた時代だったようです。昭和四七年、東京私中高協会学級経営研修会において、テーマ「小集団指導」を発表。同年、全国私学教育研究大会で公開研究授業実施。昭和四九年、全国私学教育研究大会の講師を委嘱される。昭和五一年には全国高等学校倫理社会研究大会を本校開催に導き、先生は公開研究授業をなさる。昭和五三年、東京私中高協会・社会科箱根研修会において、テーマ「社会科の視点」を発表。昭和五五年、東京私中高協会・社会科研究会で公開研究授業実施。こうした実績により、昭和五七年に、本校は全国私学社会科研究指定校となる。同年、全国私学教育研究集会が開かれ、先生は公開授業をなさる。このように先生の教育研究活動の経歴は輝かしいものです。

しかし市川先生の関心は、こうした教育研究活動に留まりません。仏教・カウンセリング・文学と極めて広く、また各種研究会への参加も活発でした。こうした先生の旺盛な活動力の影響を受けた生徒・教員も多かったと思います。私も、正法眼蔵や成唯識論の講読会、竹内敏晴氏の朗読会やカウンセリングの勉強会に誘って頂きました。

市川先生の、あの全方位的興味・積極的行動力・粘着的追究力には、いつも感心させられました。時に、先生のあの好奇心の広さや行動の果敢さに、眩暈を感じ、逼迫した行動と激情的窮追とを感じることもありました。穏やかで冷静で論理的な物言いの中に、自虐的な言辞が混ざりはじめ、積み上げられた論理が原則に戻ろうとする気配を見せる。カタストロフィーの始まり。揺り戻しがじっと胸に押し込められ、やがて激情的窮追となって奔流を始める。目の子が揺れ、声が乱れ、手が震える。しばらくして濫溢は治まり、微かな笑みに、再びほのかな自虐が表れて、再びいつもの先生に戻る。授業のひとこま、職員会議のひとこまに見せた先生の激情が、妙に懐かしい。私が怠惰になった時に、先生の激情と自虐が私の胸に思い出されて、私を揺り動かすような気がします。

現在も、長野の愛育園で子供達と格闘中と聞いております。また幾つもの研究会にも積極的に参加されているとお聞きし、いつまでも衰えることのない市川先生に、遠くから声援を送りたいと思います。（久保田）

□□永年勤続者表彰□□

平成三年度の記念総会席上にて、七名の教職員方が、永年勤続（三十年・二十年）の感謝として同窓会より記念品を受けられました。

◎三十年勤続

佐藤　正　教諭

表彰されるということについてはあまり縁のなかった私であるが、はからずも昨年、勤続三十年の表彰を受けることになった。（学校法人駒沢大学からと、駒大高校同窓会からのものであった。）

私の生命の半分以上を同一の職場で勤務することができたことは、正に確実な時の流れと共に、平穏な社会に恵まれたためであって私の評価にはあまりならない。もともと私は転職を経験してきた身であり、三十年という実感の伴わない文言に驚いている。また、言葉どおりの教育活動への尽瘁であったかも疑問である。ただ私の感じとったことは、すべて事を成すには順序があるということと、その順序には時が流れるということである。これからは事の順をわきまえ、あせらずに人生の絨氈を楽しく織る心境で生きたいと思う。

同窓会から記念にいただいた絵画は、そのための清涼剤をいつまでも与えてくれるように思う。

菊地　祐吾　教諭

同窓会創立四十周年記念式典に於いて永年勤続（三十年）の表彰を受け大変感激している。とは言っても永年勤続の表彰は人物とか業績には何等かかわりなく時の流れに対するものである。

しかし、何はともあれ表彰されるという事はなんとなく心よいものである。（感謝しています。）

さて、この三十年間を振りかえって見ると、駒大高校は勿論のこと、社会的にも大きな変化、発展の時期であった。戦中、戦後の混乱期を脱し、ようやく平和がもどり、経済的には高度経済成長期を迎え、所得倍増の時代となり、社会的には第一次ベビーブーム期の子供が高校入学の時期を迎え、それに伴い駒大高校も飛躍的発展をとげた。

生徒の増加とともに、渋谷から駒沢へ、駒沢から用賀の地へと三度校舎の新築と移転をしなければならない盛況であった。

こうした時期に奉職出来た私は大変恵まれたというべきであろう。しかし、ベビーブーム期が過ぎ中学生の絶対数が急激に減少し、元号が昭和から平成へと替った頃から、経済活動に陰りが見えはじめ、これまでのように時の流れのままにという状態では立ち行かない情況になってきた。このままでは零細化、小規模校への転落は必定である。

したがって、これからの数年間は駒大高校にとって正に正念場の時であり、駒大高校一〇〇年のために大転換を計らねばならない時である。

企業に喩えていえば、設備投資をはかり、設備の充実と合理化により生産性を高め、社会のニーズに答えられる体制作りが必要である。これが新生駒大高校へ転換する唯一の道である。

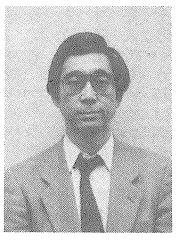
社会と生徒のニーズに答え、多様化した教育に対応出来るニュー駒大高校つくりに英知と衆智を結集してお互いに頑張りたいものである。

◎二十年勤続

池田　茂雄　教諭

北海道苫小牧高校より転出して二十年。東京駒大高校四十年記念祝典に表彰されるとは……大学出てから長くて短かいこの一瞬の化転の人生。長生きはするもんですネ。生きてこられて六十の年を過そうとしての半生を大幅に改新している現在。せめて精神の春春を点火させつつ、精一杯教育現場で頑張っていきたいと念じています。昭和より平成と時代は大きく転換しつつあります。戦争から平和、そして自由、この大きな歴史の動きの中に私も生きて来たのです、そして更に大きな時代の変化が働いています。その流れと渦の中で若い仲間（同僚・生徒）に「おくれ」をとらぬようちょっとおっちょこちょいでさすがベテランといわれるようキバって頑張っていきたいと思います。皆様ヨロシク!!

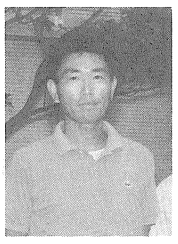
二瓶　要功　教諭



同窓会よりクリスタル花瓶をいただいた。ありがとうございます。光陰矢のごとし、あっという間に二十年が過ぎてしまった。この間五回の卒業生と一万人強の卒業生を送り出した。白髪も目立ってきたがこれからが教育生活の折り返しになる。花瓶の輝きと重たさを感じた時あっという間に過ぎた二十年間を振り返った。最初の十年は生徒たちと対決気味のがむしゃらな毎日、そしてこの十年間はなんとなく生徒たちとかけ橋がつくれそうな十年間だった。そしてこれからの十年十年は気合いの入った磨きのかかった年月にしたい。気持ちは若く楽しい教室をめざしたい。

パーティーでは沢山の卒業生の皆さんが声をかけてくれ、大変楽しいひと時でした。

中島　勝彦　教諭



二十年の歳月は長い様で短く、あっという間に月日が過ぎ去ってしまいました。

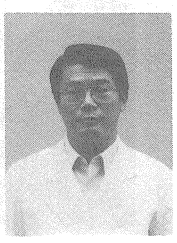
教壇に始めて立った時は極度の緊張感で、心臓の鼓動は速鐘の様に打ち、手や額には、冷汗が流れたものです。慣れない授業にも日→日と経験を積み重ねる事によって、昨日より今日、今日より明日と少しでも良いクラス運営にむけて、努力してきました。特別派手な事もありませんが、平凡な生活の中に充実した日々を送れました事は、ただ一重に諸先輩方の御指導のお陰です。これからも尚、一層頑張っていきたいと思います。今後共宜しく御指導下さい。

伊藤　優　教諭

私は、大学四年の春に田舎の出身中学で教育実習を体験し、教師に魅力を感じ教職に就くことを志望した。

縁あって本校に奉職が決まったときの喜び、新任として勤まるのかといった不安、そして新任紹介のとき壇上で大勢の生徒の前に立ったときの緊張感は昨日のことのように思い出される。若い生徒と毎日接していると新任教員としてはじめて教壇に立った日から、はや二十年、歳月の速さを感じる。学生時代の友人や新任当時受け持った卒業生に合ったとき「当時と変わっていない」と言われるが（何が変わっていないのか定かでない。私にとっては進歩がないようで抵抗がある。）これを機に初心に帰っていつまでも若さを保ち生徒に接して行きたいものと思っている。

鈴木　貞雄　教諭



原稿依頼を受けて改めて二十年間を感ずるが、いざ振り返って何があったろうと思うと何も浮んでこない。教員という職業そのものが変哲のある職業とは思わないと自己に言聞かせて納得するしかありません。社会の動きに鈍い教員が私かもしれない。

素直な生徒が多く、接しやすい生徒ばかりである。自己の年令と違わない人と接していたのが今日は我子と同世代と接し、あの時、あのようなアドバイスをしたがよかったのかと思う反省の日々でもある。が毎日が楽しいです。先日もあるスキー場で「先生」と声を掛けてくれた一人があった。この時ほど嬉しい時はない。小言を言った一人が元気に活躍されていることを知ると安心する。だから教員が続けられるのだろう。

同窓会の今後の発展を願います。

平成三年度役員総会開催

四月二十五日㈭午後六時より、顧問および役員が参加し、二子玉川駅前「富士観会館」にて、役員総会が開催された。

総会は森本勝氏（四期）の開会の辞で始まり、秋山会長は挨拶で本年は四十周年を迎え、記念事業実施の年なので同窓生、役員の一層の協力を要請された。

続いて羽住名誉会長より学校としても同窓会四十周年記念事業に協力をしたいとの祝辞があった。

田上太秀氏（四期・副会長）を議長に選出し、審議事項に入る。

一、平成二年度事業報告庶務、一期＝原正男氏

一、平成二年設決算報告会計、十六期＝妻倉由明氏

一、平成二年度会計監査報告　会計監査、八期＝浜田好晃氏より、決算について監査の結果、適正であるとの報告があり、承認。

一、役員改選　全員留任

一、平成三年度事業計画審議、一期＝原正男氏より四十周年記念事業、同窓新報四十周年記念号の発刊についての説明があり、承認。

一、同窓会四十周年記念事業について、秋山会長より、式典の準備等の説明があり、役員の協力を特に要請された。

一、平成三年度予算審議会計　十六期＝妻倉由明氏より説明があり、原案通り承認。

以上の通り本年度は、同窓会四十周年記念事業＝特に式典開催への努力と協力が確認された。

その後、席は懇親会に移り、同窓会四十年の歩みに話がわいた。

特別会員の移動

平成二年度退職者

専任
市川　仏乗（社会31年）

事務
小坂　規矩雄
（事務長27年6ヶ月）
宮下　誠（2年4ヶ月）

講師
富谷　俊治（英語二年）

平成三年度就任者
上田　栢生（事務長）
塚本　利男（英語）
小山　誠（英語）
柳沢　敦子（事務）
城　英彦（事務）
（9月～）

〔同窓生だより〕原稿募集

近況報告・思い出・クラス会報告（写真も可）案内・消息など、どしどしお寄せ下さい。

一〇字・二〇字から、原稿用紙（四〇〇字詰）5枚位まで、自由にお書き下さって結構です。

尚、十二字詰でお書きいただければ、尚更幸甚。

《編集を終えて》

いろいろなことのあった一年だった。市川先生の定年による退職、小坂事務長の退職、寺崎教諭の志なかばにしての逝去、専門こそ違うがそれぞれに持ち味を生かしておられた方々が母校を去っていかれた。寂しい限りである。

昨年五月に行われた記念総会、老いも若きも一堂に会し、時の経つのを忘れるひとときだった。役員一同無事盛会裏に終えることができ、ホッとしている。この新報で報告してやっと一段落という所か……。

〔会　計　報　告〕

平成３年度予算

1．収入の部

	予算額
前年度繰越金	11,980,282
終身会費（10,000×539人）	5,390,000
計	17,370,282

2．支出の部

事務費	1,300,000
通信費	100,000
会議費	800,000
慶弔費	500,000
同窓新報発行費	2,500,000
クラス会助成費	200,000
クラブ助成費	1,000,000
名簿関係費	200,000
同窓会40周年記念関係費	5,000,000
予備費	1,000,000
小計	12,600,000
繰越金（預金）	4,770,282
総計	17,370,282

平成２年度収支決算報告

1．収入の部

	予算	決算
前年度繰越金	10,562,679	10,562,679
終身会費（10,000×）	5,300,000(530)	5,300,000(530)
雑収入		750,000
利息		356,179
計	15,862,679	16,968,858

2．支出の部

	予算	決算	備考
事務費	1,300,000	918,103	名簿印刷代他
通信費	100,000	59,834	通知類発送費
会議費	800,000	293,298	総会・役員会費
慶弔費	500,000	551,149	12件
同窓新報発行費	2,500,000	1,482,100	
クラス会助成費	200,000	30,000	6件
クラブ助成費	1,000,000	618,000	吹奏楽部へ楽器援助スーザホン２本
名簿関係費	200,000	0	
40周年記念関係費	5,000,000	1,036,092	委員会費・通知代
予備費	1,000,000	0	
小計	12,600,000	4,988,576	
繰越金（預金）	3,262,679	11,980,282	
総計	15,862,679	16,968,858	

上記の通り、関係書類監査の結果、妥当且適正であることを証明いたします。

平成３年４月20日　　浜田　好晃　　印